



[研究ノート] ウィーン中央駅の難民支援活動団体 トレインオブホープについて

著者	齋藤 公輔
雑誌名	独逸文学
巻	62
ページ	25-31
発行年	2018-03-20
その他のタイトル	[Notiz] Uber "Train of Hope" : Fluchtlingshilfe auf dem Wiener Hauptbahnhof
URL	http://hdl.handle.net/10112/13160

ウィーン中央駅の難民支援活動団体 トレインオブホープについて¹

齊藤 公輔

はじめに

2015年の夏から秋にかけて、ドイツを中心にヨーロッパ各地に難民が押し寄せたことは今なお記憶に新しい。この出来事がもたらした余波は決して小さくなく、ドイツ国内では右翼政党「ドイツのための選択肢」(Alternative für Deutschland, AfD) 台頭の要因ともなり、ドイツ国外ではイギリスのEU 離脱 (Brexit) の遠因となったともいわれている。ドイツのメルケル首相は当初、難民の受け入れに積極的な姿勢を示してきた。しかしテロなどの厳しい事態に直面したことにより、現在は難民受け入れに対し慎重な姿勢を示しているようである。

ドイツやヨーロッパのこのような状況は我々にとってまったく新しいものではなく、周知の事実であることに異論はないだろう。いまやドイツの難民事情は注目の的であり、その行く末を誰もが固唾をのんで見守っている。

これとは対照的に、2015年に難民がドイツに到着する前のことはあまり知られていないように思われる。むろん、バルカンルートと呼ばれる経路は有名である。つまりハンガリー経由でウィーンへ渡り、そこからさらにミュンヘンへ至るルートを通してやって来たことは非常によく知られている。しかし、その道中でいったい何があったのだろうか。難民たちは幾多の困難を抱えていたはずであるが、それらはどのように解決してきたのであろうか。

1 本稿は2017年11月18日関西大学独逸文学会第110回研究発表会で行った報告内容から一部を抜粋し、大幅に加筆したものである。

本稿では、2015年にウィーン駅に到着した難民たちを支援した団体「トレインオブホープ」(Train of hope)の活動について紹介する。ウィーン駅は、ドイツよりも先に、押し寄せてきた難民への対応を迫られた場所である。トレインオブホープに関する報告を通して、ドイツにおける2015年難民問題のはじまりについて少しでも視野を広げることができれば幸いである。

トレインオブホープについて

難民は8月31日にウィーン西駅に、翌9月1日にウィーン中央駅へ到着した²。このとき、ウィーン西駅でボランティア活動に従事していた人々の中からウィーン中央駅へ支援に向かったことが、難民支援団体「トレインオブホープ」のはじまりである³。トレインオブホープHPによれば、9月3日にはトレインオブホープという名前で活動を開始し、すぐにソーシャルメディアやSNSなどを通じて状況を伝えはじめた⁴。

なお、難民がハンガリーからウィーンへ徒歩で移動をはじめた際に、その状況などが#marchofhope(「希望の行進」)というハッシュタグでウェブ上に紹介されていたようである⁵。トレインオブホープという団体名は、ここから着想を得て名付けられたことが容易に想像できる。

活動を本格化させることと並行してSNSなどで情報発信を続けたトレインオブホープは、オーストリア国内外から多くの関心を集め、活動開始から3か月後の2015年12月には、「オーストリア人権連盟」(Die Österreichische Liga für Menschenrechte)より優れた活動を行っている個人や団体に贈られる「人権賞」(Menschenrechtspreis)を授与された⁶。

2 Train of Hope *wie alles began* (http://www.trainofhope.at/_www_/wie-alles-begann/) 2018年1月9日アクセス

3 Wolfgang Gratzはトレインオブホープ設立を2015年8月25日としている (Gratz, Wolfgang: „Das Management der Flüchtlingskrise“. Wien, Österreich: NWV Verlag, 2016. S. 148.)。しかし本稿では、トレインオブホープHPの記述に従うこととする。

4 Train of Hope *wie alles began*.

5 Ebd.

6 オーストリア人権連盟HP (<http://www.liga.or.at/news/ein-halbes-jahr-her/>) 2018年

2015年12月末にトレインオブホープは、流入する難民の状況等が落ち着いてきたこと、冬になり駅構内で活動することに天候的な支障が出てきたことなどを理由にウィーン中央駅での活動を終え、現在は支援物資の提供、難民の相談役、難民と市民社会間のネットワーク構築などを中心としたさまざまな支援を行っている⁷。

トレインオブホープの活動について

トレインオブホープは、ウィーン中央駅の一角にさまざまな難民支援サービスを集中させ、駅に到着した難民が次の目的地へ向かうまでのあいだに必要な支援を提供した。具体的には、医療サービスや育児サービス（託児施設含む）、衣服提供サービス、支援物資の呼びかけなどである⁸。特に医療サービスについて、出産設備を整えていたことは興味深いことである。執筆者は、2017年7月にウィーンにてトレインオブホープの中心メンバーにインタビューする機会があった。そのなかで、最優先に解決しなければならない問題のひとつに妊婦への対応があったことを聞いた。欧州への長い旅路のなかで身ごもる女性が少なく、臨月を迎えた妊婦のサポートが急務だったという。この話を聞くまで執筆者は、難民支援における医療サービスについて出産サポートの必要性にまったく気が付いていなかった。

トレインオブホープの活動拠点は、駅に隣接している市営サイクルサービス場である。100平方メートルほどの敷地に事務局やメディアプレスが設置され、上述したような支援体制を構築していったのである。どのような経緯で市営サイクルサービス場がトレインオブホープの活動拠点になっていったのかは調査中であるが、行政と連携していたことがうかがい知れる。

1 月16日アクセス

7 Train of Hope was wir tun (http://www.trainofhope.at/_www_/waswirtun/) 2018年1月16日アクセス

8 „Wie Hilfe auszusehen hat“ (<http://fm4v3.orf.at/stories/1762634/index.html>) 2018年1月22日アクセス

ここで、2015年9月6日の時点でサイクルサービス場に支援体制が築かれていたことに注目したい。トレインオブホープ名での実質的な活動が9月3日からだとすると、わずか3日でこうした体制を築いたことになる。もちろん8月31日には難民がウィーン市内に到着しており、そして当然到着以前から支援体制を整えていたであろうことは想像に難しくなく、それゆえ準備時間もある程度あったのかもしれない。しかし、それでもなお非常に素早い体制整備であったことは間違いない。今後トレインオブホープの調査を進めるにあたり、支援体制構築のプロセスについても詳しく調べていきたい。

トレインオブホープが果たした役割について

これまで、トレインオブホープの概要と主な活動について紹介してきた。しかし、これらの活動が人道的な見地から非常に素晴らしいものであることは論を待たない一方で、誤解を恐れずにいえば特に目新しい活動ではない。同じウィーン市内にあるウィーン西駅では、カリタス (Caritas) という国際的支援団体とボランティアが難民支援を行っていたことを考えると⁹、トレインオブホープだけが難民支援を行っていたわけではないことは明らかである¹⁰。

それでもなおトレインオブホープは「もっとも有名なボランティア組織」¹¹としての地位を確立し、2015年にはすべての難民支援ボランティアを代表して人権賞を受賞していることを考えると、トレインオブホープは他の団体とは一線を画す存在であるといえる。それでは、どのようにしてトレインオブホープは、もっとも有名で、全ボランティア活動者を代表する組織になったのだろうか。執筆者はその理由のひとつとして、トレインオブホープの組織性を挙げることができている。これによって、従来のシステムでは解決できなかったであろう問題をスムー

9 „Brauchen DRINGEND SIM-Karten“ (<http://orf.at/stories/2298280/2298281/>) 2018年1月9日アクセス

10 Vgl; Gratz, Wolfgang, S.148.

11 Ebd.

ズに解決することができたのである。

トレインオブホープの組織性とは、ひと言でいえば「オートポイエシス的」¹²なものである。トレインオブホープが、活動開始からわずか数日でさまざまな支援体制を構築していたことはすでに言及したとおりである。また、「[トレインオブホープが] バナナを求めていると言えば、30万の人々にその情報がいきわたり、1時間以内に100キロのバナナが届けられた」¹³。こうした柔軟かつ即時的な支援を可能にするためには、官僚的な組織では対応が難しい。事実、先述した2017年7月のインタビューでも、トレインオブホープ結成の背景のひとつとして行政組織における意思決定プロセスの遅さが指摘された。こうした問題を解消するために、トレインオブホープは、次々に機能を分化（Ausdifferenzierung）させる方策を選択したのである。

トレインオブホープは、その唯一の組織ではないが、しかしオートポイエシス的な、つまり自身で[組織の要素を]構成していく組織形態の好例である。それは機能分化、すなわちコーディネートの作業班や部門を組織的に作ることによって、そうしたこと[オートポイエシス的組織]を可能としたのである。そうすることで、さまざまな救援サービスが毎日24時間無休で提供された¹⁴。

具体的に、医療サービスを例に挙げて説明する。メンバーによれば、難民到着当初は妊婦へのケアをまったく想定していなかったそうである。つまり、その段階で出産に必要な産婦人科医や医療機器、出産用スペースなどが確保されていない状態であった。しかし、妊婦への対応が必要であることがわかると、すぐに医療サービスのなかに出産に対応できるシステムを構築し、瞬く間に出産体制を完備させたということである。

トレインオブホープの支援者は全員がボランティアであると説明があ

12 Ebd., S.177.

13 Ebd., S.50.

14 Ebd. ただし括弧は執筆者。

ったため、産婦人科医も同様に無給で奉仕していたに違いない¹⁵。すべてが無給の出産体制を迅速に構築することは、おそらく行政組織には難しかったであろう。組織を柔軟かつ迅速に分化できるボランティア団体が、組織上行政では対応が困難であった部分を補完し得ることを示したところに、トレインオブホープの名が世界に広がっていった要因があると考えられる。少なくともトレインオブホープが、ウィーン市における行政組織のあり方に一石を投じたことは間違いない。

これ〔トレインオブホープ〕はそれだけでなく、ウィーンの新しい施政方針に影響を与えた。すなわち、「ウィーン市は、従来の支援団体の枠外に位置付けられる市民ボランティア団体が活動しうる体制を整備する。」¹⁶

まとめ

本稿のなかでも言及しているとおり、当時のウィーンでトレインオブホープだけが難民支援を行っていたわけではない。個人や団体、ボランティアや公的支援の枠組みを超えて、ウィーンが丸丸となって難民支援を行っていたのである。そのなかでトレインオブホープは特に、迅速に組織を分化させることができる柔軟性を備えていたことで、難民支援の代表的存在として有名になっていった。そしてその重要性が認められ、ウィーン市の施政方針にこうした支援形態を組み込むことが明記されるに至ったのである。

冒頭で述べたとおり、難民問題はドイツの政治的社会的危機の発端といえることができる。この問題を解決することは決して容易なことではない。トレインオブホープの活動は、旧来の枠組みにとらわれず、表面化

15 トレインオブホープの支援者全員が本当に無給であったかどうかは、今後調査する必要がある。

16 Gratz, Wolfgang, S.50. ただし引用内の括弧はウィーン市 HP (<https://www.wien.gv.at/politik/strategien-konzepte/regierungsuebereinkommen-2015/wien-mischt-sich-ein/>) 2018年1月26日アクセス

ウィーン中央駅の難民支援活動団体トレインオブホープについて

する問題に柔軟に対応することが問題解決の糸口になり得ることを我々に示している。